

第1回「農村振興政策推進の基本方向」研究会 議事要旨

日 時：平成19年10月23日(火)15:00～17:00

場 所：農林水産省第2特別会議室

出席委員：三野座長、近藤委員、澤井委員、中野委員、
野口委員、宮城委員、山内委員、横山委員

【議 題】

- 1 座長の選任
- 2 会議及び議事の公開について
- 3 検討の視点について

【議事内容】

- 1 三野委員を座長とすることで了承された。
- 2 会議及び議事の公開については、会議は原則公開とし、会議資料及び議事要旨を会議後にホームページにおいて公表することで了承された。
- 3 検討の視点について、資料に基づき事務局より説明を行った。
- 4 資料説明後、意見交換が行われた。

<委員の主な発言>

- 参院選では、中小農家の「どうしてくれるんだ」という動揺が明らかになったと思うが、「農村・農業をこうするんだ」というメッセージが足りなかった、伝え切れていなかったのではないかと。食料は21世紀の国家間では戦略物資となる重要なものであり、個人的には、少々お金をつぎ込んでも「維持していくんだ」という強い、丁寧なメッセージを出していかないと、農家の方々の理解、やる気が起きてこないのではないかと思う。また、世間一般の方々に対しても、集落が一旦消滅すると復活は困難であり、その維持コストを示し、消滅した場合のデメリットや存続によるメリットを打ち出していくことも必要ではないか。
- なかなか難しいのかもしれないが、もう少し用途を制限しない、用途を広げるやり方で、他省庁も一緒になった共通の補助金というような工夫が必要なのではないか。
- 農業政策は良い方向に展開をしていると考えていたが、現実には農家の方々の声を聞くと、なかなかそのような受け止め方をしていない。いろいろな手だてを講じていても、農家は不安がいっぱいになってきて、「戸別補償」というのが非常に耳障りが良かったのではないかと思えるような反応であった。今回の農村振興政策の検討についても、同じように受け止められないかと懸念する。
- 中山間地域の直接支払制度については、果たして役に立っているのか。地域の

取組がだんだんと疲弊していつているのが現実ではないか。そうであれば、助成の仕方を工夫するか、もっと思い切った助成をするかということも重要ではないか。単に助成しているというだけでは通用しないという農村の状況になっているのではないか。

- 現行の農村振興政策が国民的なコンセンサスがあるのかも含めて、やるのであれば具体的にきちっとした、農家が良い反応を示すやり方をしないと、少々やっても逆に、「これだけか」というような評価になってしまうのではないか。
- 施策をどう変えていくのか、思い切ったことを示していかないと、現場の不信感はどうにもならない状況。
- 厳しい農村の現状に対する政策対応として、資料の中には、さらなる検討項目として新しいものも見られるが、その他は従来政策の延長線上にあるようで、既存の政策のレビューは十分行われているのか。
- 「足腰の強い農業」とあるが、グローバル化した社会での日本農業の位置づけをどう考え、足腰の強い農業の姿・ビジョンを、可視化、ビジュアルな形でどう描いているのかが不明。
- 政策評価、アウトカムに関して、目的を達成したという状態変数をどう考えればよいのか。人口が定住化できている、農業従事者がいきいきと暮らしている姿を、どのような状態変数で捉え、後継者が育っている、若い女性が農業に従事しているというような振興している姿をどうやってイメージしたらよいかを明確にする必要。
- 経営学、マーケティングの分野かもしれないが、組織体あるいは社会を活性化する際の手法として、目標に向かおうとする組織内の抱えている強さと弱さは何かを明確化し、またその組織の外部環境が順風なのか逆風なのかといったようなSWOT(strength, weakness, opportunity, threat)をとらまえ、その上で、予算制約や人など政策のポイントをどこまで変えられるのかということを考えていただきたい。さらにSWOT分析で重要なのは、誰をターゲットにして動くのかであり、例えば基盤整備が有効というのは、若い女性が定住化し、農業に従事するということではないか。若い女性が農業に従事する割合などを調べてみて、どれくらい魅力あるむらづくり、地域づくりができるのか、どれくらい根づくのかということから農村の誇りが醸成されていくのではないか。
- 政策ビジョンを検討する上で、想定するタイムスパンをどうするのが重要ではないか。また、議論するタイムスパンにおけるメインの営農形態、いくつかのケースがあるのかもしれないが、一般的な平場での営農イメージ・担い手というのを示せないか。

- 人口減少下における人の流れとしては、地方であれ、大都市であれ、D I Dの方へ向かう都心回帰型になると思っており、資料にあるむらづくりのイメージ図での、都市と農村の中間部分において人の動きが活発になるのではないか。そのようなことから、地域構造的に、D I D部分、中間的部分、農村部分などと、イメージ図をきっちり整理したものにする必要があるのではないか。
- これまでの農業の生産インフラ、都市居住的な社会インフラについても、それぞれの地域構造が変わっていく中では、そのあり方が変わっていくのではないか。
- 成長型社会から成熟型社会となっていく中で、農村というのをどう定義するか、農村の持っているイメージをどう描くかといったときに、共通ものがなかなか描けないといった点について、構造を整理いただくときに少しイメージを埋めていただきたい。
- コンパクトシティを進めることは、ほとんどの市で困難ではないかと思っている。
- むらづくりのイメージ図はこれで良いと思うが、図にあるように、平場地域の農村と中山間地域の農村、さらに地方都市の自治会などが協定を結び、お互いを助け合う取組を進めたいと考えている。
- 人が住む居住環境としてとらえると、農村も都市も同じだが、農林地を持っている方が、より多様で豊で可能性・地域差があり、地域差を生んでいるのが農業生産ではないか。また、それぞれの地域で利便性のために何を整備していくかの優先順位は、そこに住む人が決める。その際には、半分の住民である女性の意見が反映される仕組みづくりが必要。